



TITLE:

雜纂

AUTHOR(S):

CITATION:

雜纂. 日本外科宝函 1941, 18(5): 877-882

ISSUE DATE:

1941-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/205258>

RIGHT:

De Quervain 教授を弔ふ

ベルン大學外科學教室

講 師 マックス ゼィゲッセル

Dr. Max Saegesser

1940年1月25日全く突然に、前ベルン大學外科學教室主任 De Quervain 教授は急性脾臓炎で逝去した。

僅か3日の臥床で仕事半ばに倒れたのであるが、その爲に來夏には引退して、老ひを楽しむとも空しくなつた。彼の死を哀んで居る總ての者にとつては、その死因がせめてもの諦めである。

De Quervain 教授の學者としての履歴は、現代に於ける事情とは著しく異つて居る。Langhans 教授の下に於ける短時日の修學、Kocher の下に於る3年間の修業が、De Quervain 教授が他人の指導の下に費した全時間であつた。1894年に彼は獨立した外科醫として、La-Chaux-de-Fonds に身を落ちつけた。同年彼は病院を主宰した。1907年 De Quervain は、Wilms の後繼者としてその時計製造者達の村から Basel に喚ばれ、1918年には Kocher の後任として Bern に轉じた。

De Quervain は、絶大な天賦の智力と器用な手腕に恵まれ、且つ學問上技術上實際問題に對しては豊富な理解力を有する教師並びに研究者として、一般及び特殊外科のあらゆる領域に於て、效果的に兩方面を一にして活躍した。彼は一生を通じて300以上の業績を残した。De Quervain の書いた總てのものは、獨自のものであり、また精神的獨立性を有するものであつて、その偉大な人柄を示して居るものであり、眞に彼のいづれの業績も、我々のあくなき注目値するものなのである。思慮深く一句も忽にしない質問、圓熟した觀察而も一脈の平易さを持つて居るあたり、只々感歎するばかりである。——業績の大部分は甲狀腺腫の問題に關係して居る。手技上の改良、就中 A. thyreoidea inferior を extrafascial に結紮して副甲狀腺を充分に保護する手技の完成は、特に價值のあるものであるが、此等手技的改良の外に、De Quervain は先づ第一に地方的甲狀腺疾患領域を研究した。De Quervain の、常に且つ迅速に或る問題の本態を捉へ而も效果的に消化して仕舞ふ特殊才能は、特に地方病的甲狀腺腫の不明にして尙ほ不審の多い領域に於ても、基礎的工作をなし遂げた。此の仕事は益々今後の甲狀腺腫研究の基礎として止るものであらう。胃腸外科に關係しても數多い業績がある。今日では

解り切つたことであるが、造影劑に依る示現法、排出經路の検査、此等器關の病的變化との關係等は、先づ De Quervain に負ふところが多いのである。彼は早い時代に外科的結核性疾患への日光氣候療法の價值を提示した。而も此の際にも適應範圍を速に認識して、日光氣候療法のみに偏することを警めた。De Quervain は特殊の關心を、醫教育、大學、病院、臨床問題に持つてゐた。此等は凝つて、ある程度具體的にベルン大學外科臨床の新築に現はれた。此の建物はあらゆる點で合目的性を有する臨床用建築の模範であつて、之れには外科及び教授用建築物に於て起る總ての可能性を理論上實際上、而も簡易な方法で顧慮されて居るのである。

De Quervain は此の意義多い建物を完成したことに依つて自らの記念像を石を以て建てたのではあるが、また彼はその „Spezielle Chirurgische Diagnostik” のうちに、それに優るとも劣らぬ永續性の記念像を創つたのである。De Quervain の此の著は一つの事業であつた。それに依つて彼は一躍外科的智識のみならず、外科的思惟の現代に於ける醫師教育者となつた。

此の著はその影響に於て只 Billroth の „Vorlesungen über die allgemeine chirurgische Pathologie und Therapie” に比す可きものである。學者の確固たる根底、技術者の豊富な經驗、藝術家の造形力等が、渾然と此の一卷に溶けて居るのである。本書は一つの事業であるが、更に尙ほそれ以上に、何か唯一のものと同時に彼の最善のものを我々に與へた藝術家の作品でもある。此の本はまた De Quervain の、外科更にそれ以上一般に醫學の教職に関する視角の廣い見識を開く鍵ともなつて居るのである。—— De Quervain の外科醫及び教師としての生活は、全科を完全に物にしようとし、更にまた醫學の他の方面との結合を作らうとする努力に満ちて居た。彼は常に醫學が臟器系統、局所關係、検査法と無意味な分裂を行ふことに對して反對して居た。彼は斯る分裂傾向の多くには、ある論理的思想が根本をなして居ることを認めては居たが、他面斯の様な思想は究局の作用に於て教育のみならず患者への障害を來すものであることを否定しては居なかつたのである。斯の様な傾向が、De Quervain 程の全體主義的精神に於て邪魔物に成るに違ひないことは、文句なく理解し得るのである。

獨逸系瑞西人の頑丈な力と峻嚴な聰明さは、羅馬的感情移入能力と相まつて—— De Quervain の先祖は佛蘭西新教徒派である——教師としての彼の人の柄に卓拔無比の刻印を與へた。

De Quervain は、外科の範圍を乗り越えて、現代の偉大なる醫師教育者の一人となつた。そしてその周圍には各國から門下生が集つて來たのである。彼の精神は彼等の中に尙ほ生きて、更に來る可き時代の人々に働きかけるであらう。

De Quervain 教授と Bern への回想

青 柳 安 誠

昨年秋であつたらうか。それまで送りつけて居た De Quervain 教授への外科寶函が gestorben と黒枠のついた Bern 郵便局のレツテルが貼られて我々の手許に戻つて來たのは。それで初めて私は同教授の死を知つたのであつたが、私は早速 Saegesser 講師に手紙をして、追悼文を書いて貰つたのである。同君からは可成の時日を経て本號に譯載した様な文を送つて來た。そしてそれに依つて初めて同教授の死因が急性脾臓炎であつたことも知つたのである。

外科醫となつた頃、私は街の名も無い古本屋の店隅に、迷ひ込んだ厄介物に困つたかの様に並べてある彼の Spezielle Chirurgische Diagnostik を、それ故に殆んど只同様の値段で買ふて來たのであつたが、その後此に類した著書は獨逸からも種々と出たとは言へ、その體系にしる内容にしる此の著に及ぶものは未だに知らないのである。蓋し此の著のみが數十と版を重ねて行く所以であらう。私は若しいつかの日に渡歐の機会があるならば、一度同教授を訪ねてみたいと思つて居た。それに Bern は私の恩師鳥潟先生が6年間の研究生活をなされた地であり、また我々の講座の創始者である伊藤隼三先生の御勉學の場所でもあるので、どうかして訪ねてみたいとの念願を常から抱いて居たのである。

× × × ×

居を構えて居た Heidelberg の冬は特にその年は冷くて、耳も千切れる様な寒氣が毎日毎日續いたのであつたが、Basel から Zürich へと辿りついた時には、あの Zürich 湖面には春霞にも似たものが立ちこめてゐて、湖の彼方に立並んでゐるアルプスの山々も判つきりと見極め得ないほど暖い日が多かつた。私は嘗て Billroth が伯林の Langenbeck の許から Zürich の大學に赴任した時に、Billroth へ宛てた恩師の手紙の中に「御身は遙に幸福である。當地では今北東の空つ風が街々の塵を吹きまくつて居るのに、御地は今や花の香に満たされ、春の陽に恵まれた盆地だもの」と言ふ文句があつたことを思ひ出して居たのである。Zürich の Clairmont 教授のクリニックには約一週間ほど居たであらうか。高臺にあつて Zürich 湖を見下すあの眺めと、眞に元氣な Clairmont 教授の行動に魂を奪はれた譯でもなかつたが、Clairmont の臨床講義と言ふものは熱そのものであつて、私は實に吸ひつけられる様に墮き入つたものである。

それに私はその頃 Billroth の傳記を読んで居たので、Billroth が大學教授として初めて職を執つた地が非常になつかしく、彼が建てた講堂のモザイク張りの床や、そこに掲げてあるその當時の精氣溢る彼の肖像に見入つたりして居た。そしてまた Zürich は高校時代に讀んだ Gottfried Keller の誕生地でもあつて、私は未だ保存されては居るが、その階下はお菓子屋かに變つて居た彼の生家を見に行つたりしたのである。

Zürich から Bern へは汽車で 2 時間ばかりで着いた。Zürich での或る朝、廻診の始る前に助手の一人と話した時、その助手は「全瑞西の人口は 400 萬で巴里位のものだが、それに大學が 6 つ (Basel, Zürich, Bern, Freiburg, Lausanne, Genf) もあるので、材料は集らない」と言つて居たが、このうちで Basel, Zürich, Bern の 3 大學は獨逸語で、他の 3 つは佛蘭西語を以て講義するのである。私はこのうちで前 3 つの大學だけを巡つて、その最後として Bern に着いたのである。1936 年 1 月 19 日であつた。Bern は Zürich に比べて幾分か冷たかつた。停車場に降りた私は、何處の土地でもする様に、直ぐ停車場の賣店で市内地圖を求め、豫め Hospiz 一覽表で見當をつけて置いた宿の在處を地圖に求めて、徒歩で行つたのである。

着いたみたら、大抵の Hospiz がさうである様に古臭い一寸異様な頑丈な建物で、重々しい扉を開いて廣場を抜け階段を二つ上つた三階が目的の Hospiz になつて居た。そしてその建物の一部はまた女學校にでもなつて居たとみえて、如何にも若々しい女學生連が足よりも輕やかに歸つて行くのに出逢ふたりした。

街に出てみると、驚いたことに商店街の家並みの前通路には、恰度雪國である自分の郷里の街でみる底の様に、すうつと屋根に似たものがついて居て、土地の人は之を Korridor と呼んで居たが、雨が降つても少しも濡れることなしに通りの端から端まで歩ける様になつて居た。

Bern の町は Aare 河が V 字形に曲つて居るその尖りの部に拓けて居て、而も非常な高臺になつて居るから、橋の上に立つて下を眺めると青く澄んだアルプスからの水が、怖しいまでに遙かを流れて居るのである。そしてその眼を前方にやると、アルプスの山なみが實に身近に迫つて男々しくその峻峯を展げて居るのである。特に古街の通路の中央には、色とりどりの井戸 (Brunnen) が並んで、それがまた必ず各々異つた彫刻像を持つてゐるから、眞に趣の深いものがあつた。空あくまで高く、氣あくまで清く、私は石を敷きつめたこの古街の舗道をぼくりぼくりと獨りで歩いて居ながら、恩師達の残された足音が地の底からしのびやかにかへつて來るのを感じたのであつた。自分の不覺は、入れて來たと思つたメモが手提鞆の中に無かつたので恩師が嘗て下宿して居られた Gesellschaftstrasse の名が思ひ出せず、遂にその前まで行くことも出来なかつたが、伊藤先生が研究の餘暇に釣の絲を垂れられたのはどの邊だらうかなどとも考へたりして、河縁りまで下つて行つたこともあつた。

Bern の町は、自分にとつては忘れてならない先生達と關係の深い土地なので、風物から來る魅力もさることながら、矢張りこの心的のつながりが、此の土地にとつてはいはゞ一介の旅人に過ぎない自分をひどく惹きつけるものがあつたのである。

着いた日の午後大體の状態を知らうと思つてクリニクに出掛けてみた。停車場前から①の番號のついた電車に乗つて、大分町はづれに近い Insel で降りると直ぐ Inselspital が在つて、その中に彼のクリニクも存在して居た。標札でも何でも、文字の並べてあるところは、獨語と佛語が必ず併記されて居るのである。氣の毒なことである。獨語は話せないが英語の話せる

看護婦が居て、翌日の教室日程を告げて呉れたので、その日はその儘で歸り、翌朝は早く出かけた。恰度登院された外套姿の教授に廊下でお目にかかれたが、丈の低い併し肥つて下つ腹の出た、頭髮を短く刈つたどこか Schmieden 教授を思はせる柔和の人であつた。實に物靜かに語る人で、その日は臨床講義であつたが、矢張り聲が低いので離れて聽いて居る私には途切れ途切れにしか耳に入らなかつた。Spina bifida occulta と Spontangangrän の講義であつた。併し大部分に於て聽きとれなかつた。講義は獨逸語だが、患者との問答は相手によつて佛蘭西語も使はなければならない。學生に向つて質問を發してその答に批判を下すのだが、その日は最前列に居た、遠くから觀ても東洋人と思はれる坊主頭の學生に尋ねて居たのであつた。東洋人の私が行つたので、そんな心やりをみせたのだらうかなどと私は考へたのであつたが、その學生はテキパキとは答へられない様子であつた。講義が濟んだ後でその學生と校庭で話してみると、彼は南支廣東の商人の息子であつた。

翌日は手術日である。朝は早かつたが病院の入口の眞前の道には、病院に向つて Theodor Kocher の胸像が建てられてあり、それに面して立つた私には、更にその背景をなして居るアルプスの山々の、朝日に照り耀いて居る光景が今だに眼底に残つて居る程印象的なものがあつた。

手術は乳房成形術、椎弓切除術、鼠蹊辜丸の3つだけで、全部教授が執刀した。もう既に70近い老齡なので、手術の手際は甚だのろいのが目立つた。特に力の要る椎弓切除術に於てそれが著しかつた。乳房の成形術などは、我々は餘り行ふ機會に接しないが、外國では相當の年輩の婦人が、下垂乳房を氣にして容を整へるに來るものであるらしい。

Saegesser 君が述べて居る様にクリニツクの建物は成程新しく堂々たるものである。併し我が國の近來のクリニツクや獨逸の Freiburg, Tübingen また Heidelberg の建物に較べると飛び抜けて優れたものであるとは考へられなかつた。

歸國の日も迫つて居るので、私はその日限りで Bern を去り Strassburg へ向ふ所存で居たが、同教授が明日は自分の Privatklinik で手術をするから觀て呉れといふので一日延ばして翌日はそちらの方に出かけた。

Aare 河畔で、市立劇場に橋を以て對した高臺に綺麗に建てられた Victoriasanatorium がそれである。何から何まで小ぢんまりと整備された病院であつた。

甲状腺腫、胃腸吻合術、癰疽切除と凡て消毒から縫合まで教授ひとりがやるのである。

甲状腺腫は襟狀切開で潤筋筋も切斷、その後直ちに胸鎖乳頭筋の前縁から鈍鉤を以て鈍的に剝離して入り、兩 A. thyreoidea inferior をまたゝくまに結紮して、更に筋肉を順次に切離して腺腫を脱臼せしめて、兩 A. thyreoidea superior を結紮切斷、甲状腺の裏面は全體的に薄く殘して殆ど大部分を切除、一部は鋭匙で除去して、殘存腺縁を縫合し、予「硝ドレーン」管を挿

入した儘手術を終つた。

手術の合間に隣室で教授自ら壺を持ち出してスープを皿に分けて下さつて自身も口に入れられたが之はまた疲れてもゐた所爲か、現在までもあの時の様なうまいスープは食べたことがない程結構なものであつた。癢痕の手術などはその前に自分で大きなカメラを運んで来て、焦點を合はせて撮つて居られた。

70に近い老體の斯の様な連日朝からの活動を觀て、私は矢張り胸に湧き上る感激を覺えずに居られなかつた。Kocher 先生が、死なれる前日迄手術室で開頭術をやつて居られたといふお話を私は恩師から度々聽いて、彼等の「斃而後已」態の心構えに感じ入つて居たのであつたが、私は今眼の前にまざまざとその姿を眺め得たのである。併し之は嘗に De Quervain 教授のみではない。早朝から廻診、手術、講義、診察、指導と連日倦むことを知らない獨逸の教授連を私は數多く知つて居るのである。

Strassburg への汽車時間迄を、議事堂の裏山である Kleine Schanze にのぼつて眺めて居ると、どこからとなく可愛い女兒が10人程集つて来て、私を圍んで色々と話し出した。指を以てさしながら、あれがアイガア次がメンヒ、その次がユングフラウ、グロースホルン等と夕陽に茜に映えて居るアルプスの峯々の名を教へて呉れたのであるが、人なつこい彼等を前に、私は自らの姿をも混へて寫眞を撮つてやつたのであつた。

Strassburg には2時間餘りで着いた。翌日其處で私は、實に空恐しいほどの爆發性を隠し持つて居るのではないかと思はれる Leriche 教授に面會した。なんと彼はワイシャツ一つ、而も兩袖は肘までまくりあげ、また緑の中に赤い太い線の一本入つたズボンをつけて、意氣揚々と應接室に現れ出て、痛くなるほど私の手を握つたものである。私は此の型破りの人をちつと見詰めて居ながら、その中にムツソリーニそつくりの面魂を見出し得たのであつた。

× × × ×

De Quervain 教授と私との交渉はたゞこれだけである。而も何かしら忘れ得ない印象を受けて居るのは、彼が震へる手を使ひ乍らも自分の天職に向つて邁進して居る姿を觀たからであらう。またその人となりは、私が第二講座を主宰する様になつて、その由を報じたら「伊藤教授も鳥潟教授も自分は知つて居るが貴下のクリニクと Bern との間には離し得ない關係が成立した譯である」と言ふ返事を呉れたことでも解る。そして Kleine Schanze で寫眞を撮つてやつた子供たちからも、その後作文を作る様にして各々の手紙をひとまとめに度々送つて來た。そしてもう現在では女學校も卒業してしまつたといふそのうちの一人は最近まで、驚くほどよく訓練された知識を各方面に渡つて書き連ね、特に日本の風俗禮儀作法に對する概念を、眞を穿つて述べて寄こして居たが歐洲の事情が深刻化して來た所爲でもあらうか、それもパタリと來なくなつて、私は朗かな彼等の姿を喰の裏に描き得ながらも甚だ淋しいのである。